様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　４月　１日現在

機関番号：16201
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20530347
研究課題名（和文）　社会的起業家活動と地域における経営戦略：文化産業創出のメカニズム解明
研究課題名（英文）　The multi-case studies of social entrepreneurship and local business strategy: In search of the creation mechanism of cultural business

研究代表者
松岡　久美（MATSUOKA KUMI）
香川大学・経済学部・准教授
研究者番号：30325310

研究成果の概要（和文）：
事例研究を積み重ねることで地域における文化的な事業の創出のメカニズムを探った。その結果、ダイナミックな資源の活用・循環・創出を行うためには、社会的起業家を中心として、住民、行政、企業等の制度固有の論理を持つ利害関係者集団が互いの利害を「相互資源化」して集合的行為として関与することが不可欠となることを指摘した。また、事業の成立には長い時間を要するため、事業体からの起業家個人の離脱という課題が新たな論点として浮かび上がることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：
This paper explored the creation mechanism of cultural business by conducting the multi-case studies. We suggest that, in order to utilize, circulate and create dynamic resources, it’s essential for social entrepreneurs, citizens, local governments and private companies, who are embedded in each institutional specific logic, to exploit others’ interests as own resources and to engage in the form of collective action. We also raise an important issue concerning the relationship between social entrepreneurs and organizations, which inevitably transforms in the case of cultural businesses as building-up process requires much longer time than other industry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：経営学
科研費の分科・細目：経営学・経営学
キーワード：社会企業家、文化産業、地域資源、制度固有の論理、キャリアの出入り口、プラットフォーム、集合的行為

１．研究開始当初の背景

(1)学術的な背景

近年、英国を発端として地域の経済・社会・文化復興を目指して活動するソーシャル・アントレプレナーシップ（あるいは社会的起業家活動、中でも特に文化的起業家活動）という概念が世界的に普及しつつある（Leadbeater, 1997; Perrini, 2006)。関連の国際ジャーナル（Social Innovation Review, Stanford University）も発刊されるなど、社会的起業家活動は、大きな注目を集め、国際的に研究論文も急増している。

しかしながら、地域の事業創造プロセスにおけるソーシャル・アントレプレナーシップをミクロ的に分析する研究アプローチは、国際的な学術蓄積の面でも極めて少ない（Waddok & Post, 1991; Sullivan, 2007)。

わが国においても、社会的起業家活動にかかわる学術研究は、いまだ萌芽的な状態である。経営戦略論の一部の先駆的研究において指摘されていた企業の地域資源活用（金井、1995）に始まり、企業の社会戦略と NPO・地域連携（横山、2003；金井、2006)、CSR（谷本、1993）や組織市民活動（Organ 他、2006；田中、2004）の関連から、理念的利益還元計画や社会的市場アプローチの視点が定着したものの、その地域的な主体レベルの議論に正面から取り組む研究は、極めてまれである。

このような未解明な点を補足し、当該研究領域での理論の精緻化をはかり、海外における研究との間隙を埋めることには、学術的に大きな価値があると考えられる。特に、社会的起業家活動は、概念や対象としての領域の歴史的急拡大と同時に厳密な再定義の必要性は高まるばかりである（Martin & Osberg, 2007)。

(2)社会的・実践的な背景

近年、国内においても、様々な形式・規模での地域に根ざした社会的・文化的事業の創出の動きが活発化しており、社会的な関心や期待も高まっている。

申請者らが本拠を置く香川県内においても、全国的に注目されるようなプロジェクトや事業として、美術館・アート事業（ベネッセアートサイト直島・地中美術館、瀬戸内国際芸術祭)、スポーツ事業（四国アイランドリーグ、2008 年度より四国・九州アイランドリーグに拡大、2011 年度からは四国アイランドリーグ plus に移行)などが誕生している。

しかしながら、こうした事業の全てが必ずしも成功裏に運営されているわけではなく、事業の構想そのものの在り方、利害関係者間の関係調整や資源の動員などの面でさまざまな課題が存在しているのも事実である。

文化的事業の創造や社会的起業家の活動過程におけるボトルネックを探り、問題解決のための要素を提示する必要性が高まっていると言える。

２．研究の目的

上記のような背景を踏まえ、本研究では、地域における文化的事業の創造にかかわるダイナミックな資源の活用・循環・創出を主導する社会的起業家の活動に注目した実証研究を行うことを目的とする。

ミクロな観点からは、それまでの活動の境界を超え、新たな領域へと役割を拡張する際に起こる起業家の認知マップや戦略的射程の矛盾や変容を明らかにすることにより、地域におけるアントレプレナーの役割や行動、またその成果との関わりを関係づけるフレームワークの構築を目指す。

また、マクロな視点からは、こうしたアントレプレナーの活動を取り巻く、企業、地域、NPO 団体、行政・大学などの公的機関とのパートナーシップのあり方を検討し、地域的な資源にかかわるニーズの発見・活用・循環にかかわるダイナミックなプレイヤーの関係を捉えるフレームワークの提示を目指す。

このような作業を通して、地域が保有する経営資源を活用して事業創造する社会的起業家活動による地域的なプロジェクトの展開とその創出、発展（転換）過程における固有のロジックの解明し、社会的起業家活動研究における理論的な発展と実践的な貢献を目指す。

３．研究の方法

本研究では、企業家活動論、リーダーシップ論等の分野における理論的な検討に加えて、事例研究という手法を用いて実証研究を行い、新たなフレームワークの構築を試みた。

我々は、地域における文化的な事業の創造あるいは再生として一定の成果をおさめた事例として、国内で先進的な、あるいは、地元で深いレベルの調査が可能であった対象の中から、越後妻有アートトリエンナーレ、ベネッセアートサイト直島、瀬戸内国際芸術祭、金沢 21 世紀美術館、四国アイランドリーグ、新屋島水族館を取り上げた。

公表資料の収集に加えて、フィールド調査、ならびに関係者への継続的なインタビュー調査を行うことによってデータを収集し、事業の創出・再生プロセスとその過程における社会的起業家の活動にかかわる事実関係を整理した事例論文をとりまとめた。

こうして整理した複数の事例をもとに、地域における文化的事業の創造にかかわるダイナミックな資源の活用・循環・創出を主導する社会的起業家の活動について、主に制度的アントレプレナーシップおよび制度的ロ

ジックの側面から分析・検討を行い、新たなフレームワークの提示を行った。
その結果は、関連する国内外の学会での報告を行うことにより、得られたフィードバックをもとにさらに検討を積み重ね、事例の追加的な調査により現象との整合性も点検しつつ、精緻化をはかった。

４．研究成果
本研究による主な成果として、以下の点を指摘することができる。

(1)相互資源化と集合的行為
我々は、地域住民、行政、企業、ボランティア、アーティスト等、本来相容れることが困難な制度固有の論理を持つ利害関係者集団が文化的事業を通じたプラットフォームの模索と形成に深く関与する中で、それぞれの利害を「相互資源化」することによりはじめてダイナミックな資源の活用・循環・創出が可能となるというフレームワークを導出した。
このような協働にかかわるロジックの転換は、文化的あるいは社会的起業家とも呼ぶべき制度的アントレプレナーによる理想の追求と同時に事業にかかわる複数の異なるレベルの主体による組織フィールドへの意図的な深い埋め込みによって成立するものであった。この意味において、文化的な事業創造は、関係者による集合的な行為として成立しているとも言えるだろう。
本研究は、制度的変革を行う集合的エージェンシーの既存研究（Wijen and Ansari, 2007）が残したより詳細なミクロレベルの検討を行うことによって、埋め込まれたエージェンシーの課題に対して新たな貢献を行っている。

(2)社会的起業家の役割と課題
事業が萌芽的な段階においては、社会的起業家の活動がスムーズに関係者のロジック転換につながるわけではない。彼らの活動が既存の慣行や動員する関係者・資源との間での緊張・摩擦を引き起こすこともある。
このような矛盾をいかに戦略的に活用して新たなプラットフォームの構築につなげていくかということが起業家の役割として期待される。特に事業の性質上、中長期的なスパンでの成果につなげていくことができるような仕組みを構築することが必要となる。
また、社会的起業家の活動を現実の組織フィールドに着地させる翻訳者としての支援者の活動も見過ごすことはできない。地域の文化事業が形成される過程においては、多主体が同時多発的に関与をすることでダイナミックな資源の活用・循環の機会が創出される。
けれども、上記のように、これらのプラットフォーム内外のネットワーク関係においては、相互の利害・資源同士の整合性がとられているわけではない事実がある。
社会的起業家は、事業と組織の両面でポートフォリオを設定することによって、この時間的・空間的ギャップがつくる不確実性に対処することが必要とされる。
この起業家的ポートフォリオの課題として、本研究においては、起業家自らのキャリアや進退に本質的に関わる点が明らかになった。

(3)起業家のキャリアの出入り口
継続的な資源の動員や新たな資源としての地域への定着など、文化的事業の成長過程には、比較的長期な時間経過を要する。そのため、必ずしも１代の社会的起業家あるいはそのチームによって十分な事業的成果や効果が達成しうるとは限らない。
そのため、起業家の事業体とのかかわり方、特にその離脱のタイミングと方法が単に起業家のキャリアの問題としてだけではなく、事業体の戦略上も重要な意味合いを持つようになってくる。
社会的起業家というアクターがどのようなキャリアで形成され、また社会的起業家としての役割を果たしながら、その事業体や地域プラットフォームとの関わりを展開させ、離脱することもあり得るのか等については、これまで十分に注目されてこなかった点であり、本研究によって補われる点が大きいと考えられる。

(4)含意と今後の課題
このように単なる事業創造ではなく、地域における文化や資源など、地域の持つ固有の文脈と関連づいた形での事業創造過程の分析を行ってきた本研究は、先に述べたような社会的起業家研究における理論的な貢献をもたらすだけでなく、企業と地域、NPO 団体、行政のパートナーシップ、社会文化・スポーツ振興施策、企業メセナ活動や企業の社会戦略（CSR）についても、実践的な含意をもたらすものと考えられる。
しかしながら、文化的な事業が地域に根付く過程では長い時間を要するため、我々が示したフレームワークや論点の有効性を検証するためには、今後も継続的な追跡調査が必要不可欠となる。
なお、本研究では、entrepreneur に対する訳語として、論文等の研究報告の際には、起業家にかえ、企業家という用語をあてていることを断わっておく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８　件）

① 尾崎美紀・山田仁一郎・松岡久美、ケース・護王神社の再生とベネッセアートサイト直島―地域コミュニティにおける家プロジェクト、Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH, Kagawa University、No.166、pp.1-53、2011、査読無

② 弟子丸亜弓・山田仁一郎、ケース・金沢市の文化政策と地域コミュニティ開発、Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH, Kagawa University、No.162、pp.1-78、2011、査読無

③ 松本匡史・山田仁一郎・松岡久美、ケース・金沢 21 世紀美術館―新たな現代アート美術館の創造と運営プロセス、Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH, Kagawa University、No.161、pp.1-40、2011、査読無

④ 山田仁一郎・松岡久美、社会企業家活動の出入り口：四国九州アイランドリーグと鍵山誠氏、Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH, Kagawa University、No.159、pp.1-35、2010、査読無

⑤ Yamada, Jin-ichiro and Matsuoka, Kumi, How do institutional logics stifle or facilitate collective agency? :Regional Revitalisation in the case of the Echigo-Tsumari Art Triennial, Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH, Kagawa University, No.151,pp.1-23, 2009, 査読無

⑥ 山田仁一郎・松岡久美・尾崎美紀・神高裕則、大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ：アート・プロジェクトによる中山間地域の活性化、Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH , Kagawa University、No.148、pp.1-55、 2009、査読無

⑦ 山田仁一郎・松岡久美・前島慶仁・田村謙太、ケース・日プラ株式会社と屋島水族館の再生、Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH , Kagawa University、No.137、pp.1-25、2008、査読無

⑧ 山田仁一郎・大石純也・平島和樹・松本匡史・村尾圭亮、ケース・四国アイランドリーグの開幕と事業展開、Working Paper Series, THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH , Kagawa University、No.134、pp.1-25、2008、査読無

〔学会発表〕（計３　件）

① 山田仁一郎・松岡久美、大学等所属研究者の事業創造プロセスへの関与と役割、組織学会研究発表大会、中央大学、2010年６月６日

② Matsuoka, Kumi and Yamada, Jin-ichiro, How do institutional logics stifle or facilitate collective agency?:Regional revitalisation in the case of the Echigo-Tsumari Art Triennial,the EGOS 25th Colloquium, the European Group of Organization Studies, ESADE Business School, Barcelona, 2009年７月４日

③ 山田仁一郎・松岡久美、アート・プロジェクトによる中山間地域の活性化：越後妻有アートトリエンナーレの事例分析、組織学会研究発表大会、組織学会、東北大学、2009年６月７日

〔図書〕（計２　件）

① 山田仁一郎・松岡久美、「ソーシャル・アントレプレナーの役割とキャリアー四国・九州アイランドリーグと鍵山誠氏ー」、大室悦賀編『ソーシャル・ビジネス』第２章、pp.45-84、近刊、中央経済社

② 山田仁一郎、「集合財としての地域コミュニティの再構築」、明石芳彦編著『ベンチャーが社会を変える』第５章、pp.117-161、2009、ミネルヴァ書房

６．研究組織

(1)研究代表者

松岡　久美（MATSUOKA　KUMI）

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：30325310

(2)研究分担者

山田　仁一郎（YAMADA　JIN-ICHIRO）
香川大学・経済学部・准教授
研究者番号：40325311